

様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 3 月 30 日現在

研究種目： 基盤研究（B）

研究期間： 2005-2008

課題番号： 17320031

研究課題名（和文） 掛幅説話画大成のための基礎的研究

研究課題名（英文） Basic Research on the Hanging Scrolls of the Narrative Paintings

研究代表者 加須屋 誠（KASUYA MAKOTO）
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：60221876

研究成果の概要：

わが国では古代中世期に掛幅形式の仏教説話画が多数制作された。しかし、従来それらについて十分な調査研究はなされていない。そこで本研究は、日本各地に遺る説話画現存遺品を網羅的に調査すること、そのデータを明確に分類整理すること、そこから得られた研究成果を体系的に公開することを通じて、これからの説話画研究の基礎を構築した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	4,000,000 円	0 円	4,000,000 円
2006 年度	3,800,000 円	0 円	3,800,000 円
2007 年度	3,800,000 円	1,140,000 円	4,940,000 円
2008 年度	2,600,000 円	780,000 円	3,380,000 円
年度			
総計	14,200,000 円	1,920,000 円	16,120,000 円

研究分野： 人文社会

科研費の分科・細目： 哲学 ・ 美学・美術史

キーワード： 仏教、説話、絵画、美術史、浄土、六道

1. 研究開始当初の背景

我が国の古代中世の絵画は、その形体から（1）絵巻物、（2）壁画、（3）障壁画、（4）屏風絵、（5）掛幅画等に大別される。また特に仏教絵画は、その機能面から（ア）礼拝画（儀礼の場で本尊として供養）、（イ）説話画（教理内容や縁起などを物語化し主に絵説

きの場などで伝達）等に分類される。本研究は、このうち（5）－（イ）掛幅説話画に焦点を絞り、日本絵画史におけるその全体像について、遺品の体系的な調査をはじめとする基礎的な研究を企てた。

我が国に現存する掛幅説話画はさらに、その主題から①法華経絵、②仏伝図、③六道絵、④その他に分けて捉えることができる。それ

ぞれの代表的遺品に、以下の作例がある。
法華経絵／本法寺本、本興寺本、本土寺本 etc
仏伝図／持光寺本、常楽寺本、大福田寺本 etc
六道絵／聖衆来迎寺本、極楽寺本 etc
その他／高僧伝絵、縁起絵、観心十界図 etc
上に挙げた以外でも、掛幅説話画遺品の多くは国宝あるいは重要文化財の指定を受けており、その存在は少なくとも閉じられた美術史学の領域ではよく知られている。しかし果たして、より開かれた人文学諸研究において、それらはこれまで個々の領域で研究の視野に納められていたのだろうか。たとえば歴史学あるいは仏教学・宗教学などにおいて、それらはこれまで研究上活用されていたといえるのだろうか。

冒頭の分類のうち、たとえば(1) 絵巻物に関しては、戦前刊行の『日本絵巻物集成』(雄山閣)、昭和30～40年代刊行の『日本絵巻物全集』(角川書店)、昭和50年～60年代刊行の『日本絵巻大成』(中央公論社)など大部の美術全集がある。これらのおかげで、絵巻物は美術史学内部における基礎的研究の段階から、より高次の発展的研究の段階にすでに到達している。その一端は『日本常民生活絵引』(角川書店)等を活用した社会史研究・絵画史料論などに見ることができる。また(2) 壁画については『日本の障壁画』(毎日新聞社)、(3) 障壁画については『障壁画全集』(美術出版社)、(4) 屏風絵については『日本屏風絵集成』(講談社)などの全集があり、それぞれの遺品が網羅的に紹介され、美術史のみならず広く日本文化史の研究全体に寄与してきた。

ところが(5) 掛幅画に関してのみは、網羅的な全集のたぐいが20世紀のあいだ一セットも刊行されてこなかった事実気づく。掛幅説話画研究の立ち遅れは、ひとり美術史学のみならず、歴史学や仏教学・宗教学にとっても研究材料の大きな欠落部をこれまで生み出しているといはざるを得ない。

とくに絵巻物が上述のように高く研究に活用されている近年の状況を鑑みたとき、それと同主題・同時代の掛幅説話画が殆ど無視されてきたことは、これまで美術史家として掛幅説話画研究に従事してきた者にとって、自らの努力の至らなさを含めて遺憾の意に堪えない――それが、これまでの状況であった。

2. 研究の目的

こうした研究当初の学問的状況を背景に、本研究では次のことが目指された。

(1) 個別作品調査・・・現存する掛幅説話画それぞれについての基礎データを収集すること。掛幅説話画は極細部に濃密な意味内容が込められているので、個々の作品について全体とともに部分の調査及び写真撮影が必須となる。

(2) データ整理・・・各作品の部分と全体を統合すること。とくに細部図様について典拠経典・説話との照合と整理。複数作品の同一主題・モチーフ場面の比較検討。さらに文献と画像データとを自在にクロス検索可能なDB作成を目論んだ。

(3) 成果公開・・・絵巻物における『日本絵巻大成』に對置するものとして『掛幅説話画大成』および『説話画絵引』の刊行。次項「研究の方法」「研究成果」にて述べるように、中央公論美術出版からの出版計画が現在遂行中である。

3. 研究の方法

本研究は(1) 作品調査、(2) 写真資料及び文献史料の収集整理、(3) 成果公開、以上3つの項目で遂行される。以下、それぞれの項目について具体的内容を記す。

(1) 作品調査・・・現存する仏教説話画遺品のうち当初、研究調査候補に挙がっていたのは約95作品(すでに調査済みの作品を含む)。初年度(2005年度)は、まず第一にあら

ためてリストアップを正確になし、その上でそれぞれについて所在を確認し、あわせて調査が可能であるか否かを問い合わせる作業から研究は開始された。寺院の本尊として祀られる仏像などとは異なり、絵画とりわけ大幅の仏教説話画は所蔵者＝寺院のところに日頃はなく、博物館や美術館に寄託保管されている例が大半である。また、そうした作品であっても一年の一時期には寺院に返却され法会に用いられたり、また、たまたま修理期間中であつたり、その他さまざまな事情で、時と場所によっては調査が不可能なケースも少なからずある。作品毎にそうした個別の情報を中心にリストアップすることで、今後の調査研究計画の基礎を構築することを、初年度（2005年度）は目指した。この作業に続いて二年度（2006年度）三年度（2007年度）には、実質的な作品調査に従事した。併せて、掛幅説話画に高い関心をもつ他の研究者がすでに調査を終えている作品については、彼らより写真の貸与を受けることで、写真資料の充実を目指した。調査には多くの費用と労力それに時間がかかる。また調査の度毎に作品を開閉することは作品自体に少なからずダメージを与える危険がある。デジタルデータはフィルムデータよりも授受をスムーズでノイズレスに行うことが可能だ。こうしたことから、他の研究者との協調は研究当初に想定していた以上に有意義な成果をもたらすことになった。科研最終年の四年度（2008年度）はこうして得られたデータの整理に主眼を置いた。

（2）写真資料及び文献史料の収集整理・・・掛幅説話画はいずれの作品も図様が極めて細かいため、全図写真だけでは到底研究の役に立たず、相当数の部分写真が必要となる。つまり、一幅において大量の写真が撮られ、あるいは十五幅一具の聖衆来迎寺本六道絵のように複数幅で構成された作品もあり、そうした遺品を日本各地いくつも調査することか

ら、合理的で簡潔な写真資料の整理が研究の前提として必須となる。かつて私は基本的に作品調査はフィルムカメラを用いて行ってきたが、技術の発達とともに調査にデジタルカメラを用いるようになった。写真データがネガ・ポジフィルム／焼き付け写真／デジタル画像と形式が不統一なのは、研究の遂行上よくないことであつた。そこで、今後の調査ではデジタルカメラを主体として用いることに統一した上で、これまで撮り溜めてきた写真をすべてデジタルデータ化する作業を初年度（2005年度）に行った。

掛幅説話画は教理経典、寺社の縁起、高僧の伝記などさまざまな文献を読むことよつて初めてその内容が理解し得るものである。また勿論、作品の伝来に関して所蔵する寺院の古記録を参照することも必須である。私はこれまでの研究において、二河白道図や聖衆来迎寺本六道絵等について、こうした観点から文献を整理するためのデータベースを作成していた。上記したように、写真をすべてデジタル化したことにより、この文献DBに画像を付加することが容易となった。初年度（2005年度）DBの設計と構築、二年度（2006年度）から三年度（2007年度）にデータ入力作業、最終年度（2008年度）一応の完成型となった「説話画データベース」はむしろ画像を主体として、それが文献史料項目やキーワードから検索可能なものとなった。

（3）成果公開・・・所蔵者や写真撮影者の著作権保護の点から上記データベースを無条件にWEB上で公開すること等は好ましくない。データの構築の仕方からしても、それはあくまで研究のためのツールであつて、限定的な研究者間の情報交換にかぎり有益なものである。よつて成果公開、研究の社会的還元として『掛幅説話画大成』刊行を計画。中央公論美術出版と会議を重ねてきた。初年度（2005年度）より本の版形やレイアウト、作品解説（モノグラフ）内容そしてなにより

収録する作品選定について議論し、二年度（2006年度）はその計画に添うかたちで調査や資料整理を行った。その結果、三年度（2007年度）には『国宝、六道絵』発刊に至った（内容等については後述）。本書を含むところの『掛幅説話画大成』（第一期・浄土教編）は三～五冊程度の構成となる。本科研終了後に刊行の予定である。

4. 研究の成果

(1) 作品調査・・・本科研期間中、日本各地で継続的に作品調査を行ったが、紙面の都合上、ここで全作品について報告するゆとりはない。そこで特に重要と目されるものにかぎり、以下にコメントする。

①石川県・本土寺蔵「観音経絵」

『法華経』観世音菩薩普門品第二十五に基づく掛幅説話画。大幅であるがゆえに従来見過ごされてきた小場面の図様が今回の調査で初めて見出された。13世紀半作。

②奈良県・安楽寺蔵「融通念仏縁起絵」

卷子形式の融通念仏縁起絵は数種知られているが、掛幅形式のそれは本図が唯一。絵巻と掛幅説話画との図様交渉がうかがえる。14世紀初作。

③大阪府・家原寺蔵「行基菩薩行状絵伝」

中世期の行基信仰にまつわる説話画。絵解き台本『行基菩薩縁起図絵詞』の存在が知られており、情報伝達装置（メディア）としての説話画の実験的な機能を考察する上で重要。14世紀初作。

④滋賀県・延暦寺蔵「光明真言功德絵」

光明真言の種々の利益を描く作品。『絵巻大成』等に未収録。浄土教系の掛幅説話画の図様との共通点が見出された。14世紀初作。

⑤奈良国立博物館蔵「十王図」

井手誠之輔氏（九州大学）に同行させていただき、陸信忠・陸仲淵筆の二組の十王図を調査。大陸の絵画（寧波制作）に関する考察もまたわが国の掛幅説話画理解のために必要。13世紀作。

⑥大和文華館蔵「笠置曼荼羅」「病草紙（鍼治療図）」ほか

大和文華館と本科研研究代表者の勤務する奈良女子大学とは学術提携を締結している。その関係から同館「日本の仏教美術―祈りの形象―」展（2007年11月16日～12月24日）開催に協力。展覧会準備期間中「笠置曼荼羅」など同館所蔵の掛幅画を中心に調査した。また絵巻物断簡である「病草紙（針治療図）」についても、細かい調査を行った。13世紀作。

(2) データ整理・・・上記の作品調査に加え、本科研実施以前に代表者が撮りためていたフィルム写真のデジタル化、鷹巣純氏（愛知教育大学）小栗栖健治氏（兵庫県立歴史博物館）ほかより資料提供を受けることによって、4年間で15000枚程の写真データが揃った。しかし、量が膨大でも、それが研究に使えるかたちとなっていなければならない、意味がない。



仏教説話画 DB 「メニュー」画面

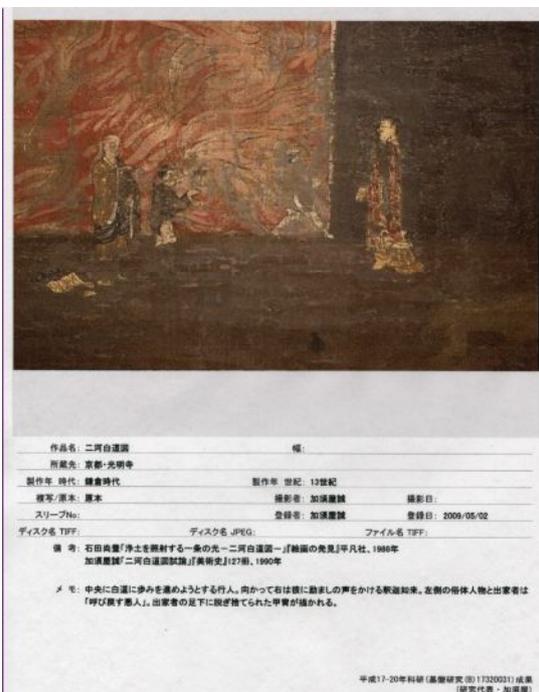


同「データ入力」画面



同「テーブル表示」画面

同「詳細印刷」画面



そこで画像と文字情報が結びつき、いずれからも検索可能な DB『仏教説話画データベース』を構築した。技術的バックアップは(株)堀内カラー(本社、大阪府北区)に設計を依頼。機能面は完成に至ったが、データは科研終了後も追加更新をはかっていく予定。本 DB のスタイルは掛幅説話画研究のみならず、他の美術史研究上でも汎用性をもつと思われる。

(3) 成果公開・・・『国宝 六道絵』(中央公論美術出版、2007年)の内容は以下のとおり。

①図版 「六道絵」

②参考図版 模本「六道絵」

③参考図版 フリーア美術館蔵「六道絵」

④論考〈伝来と研究史〉国宝「六道絵」の修復と移動

⑤論考〈技法と表現〉六道絵の作風と絵師の分類

⑥論考〈図様と位置づけ〉往生要集絵の成立と展開

⑦全場面解説

⑧資料

⑨仏文訳 A propos de Images des Six Destinees(Rokudo-e) du temple Shojuraigoji : Une introduction

⑩英文訳 The Six Realms Painted in Shojuraigoji Temple : An Introduction

まず①は金井杜道氏撮影による写真。これまで国宝・聖衆来迎寺像「六道絵」の写真に掲載した本は数多あるが、精度において本書に勝るものはない。②③を参考図版として掲げることによって聖衆来迎寺本原本理解の助けとした。続く④は山本聡美氏(金城学院大学)、⑤は泉武夫氏(東北大学)、⑥は本科研研究代表者による聖衆来迎寺本に関する研究論文。伝来・表現・図様・位置づけといった美術史学の基礎的な観点から本作品を論じた総合的な作品論(モノグラフ)である。⑦は聖衆来迎寺本 15 幅を 130 場面に分け、その一つひとつを図様・典拠経典・社会的背景等の観点から解説。これまで主要場面の説明はあったが全場面にわたる解説は初めて。本科研研究代表者による。⑧は『六道絵旧軸木銘』『六道絵相略縁起』等、聖衆来迎寺本に関する文献史料を集大成。山本聡美氏監修。⑨⑩は単に本書の概要を記したのではなく、独立した論考。欧米の識者にわが国六道絵の発展とそのなかでの聖衆来迎寺本の位置づけを十全に理解してもらうことを意図して書かれた。仏文は Laure Schwartz-Arenales 氏(お茶の水女子大学)、英文は Yukio Lippit 氏(ハーバード大学)による。

聖衆来迎寺本は 15 幅一具という他に類例の求めがたい大作であるがゆえに、『国宝六道絵』は『掛幅説話画大成』本編と別立てで先行して単行本のかたちで刊行した。しかし、これが『大成』のうちに位置づけられることは中央公論美術出版及び私の共通認識である。これに続く禅林寺本 2 幅、極楽寺本 3 幅、出光美術館本 2 幅、同 6 幅などを収録した三～五冊の『大成』（第一期・浄土教編）の刊行を現在準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

①加須屋誠 (KASUYA Makoto) "Some questions concerning the paintings of Six Realms held by Shoju Raigoji『国際東方学会議紀要』53 冊、無、2008 年、pp115-116

②加須屋誠「聖衆来迎寺本六道絵について」仏教美術研究上野記念財団助成研究会『研究発表と座談会 六道の思想と美術』報告書第 34 冊、無、2007 年、pp8-21

③加須屋誠「白と宗教」『国文学』第 51 巻 2 号、無、2006 年、pp22-31

④加須屋誠「南都復炎上とその再建」古代日本形成の特質解明の研究教育拠点『南都炎上とその再建をめぐる』奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集 Vol.2、無、2005 年、pp1-28

⑤加須屋誠「鏡のなかの鏡—熊野観心十界図をめぐる—」『美術フォーラム 21』第 12 号、無、2005 年、pp78-89

[学会発表] (計 4 件)

①加須屋誠「《都市を描く絵画》年中行事絵巻—場所・身体・まなざし—」奈良女子大学 COE プログラム「古代日本形成との特質解明の研究教育拠点」研究会 2008 年 6 月 17 日、奈良女子大学

②加須屋誠「予告された”往生”の絵」東京大学大学院人文社会系研究科グローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」公開・国際シンポジウム 死生と造形文化 II 「礼拝像と奇跡—東西比較の試み」、2008 年 5 月 31 日 於東京大学本郷キャンパス

③加須屋誠「聖衆来迎寺本「六道絵」をめぐる二、三の問題」国際東方学会議、2008 年 5 月 16 日 於日本教育会館

④加須屋誠「聖衆来迎寺本六道絵について」仏教美術研究上野記念財団助成研究会『研究発表と座談会 六道の思想と美術』2005 年 10 月 24 日、於京都国立博物館

[図書] (計 2 件)

①加須屋誠、泉武夫、山本聡美 (共著)、中央公論美術出版、『国宝 六道絵』、2007 年、総ページ数 376 頁 (うち加須屋担当分「往生要集絵の成立と展開」「全場面解説」pp195-334)

②加須屋誠ほか (共著)、東京大学出版会、長岡龍作編『講座日本美術史(第 4 巻)造形の場』、2005 年、総ページ数 348 頁 (うち加須屋担当分「ジェンダー論—地獄に堕ちた女たち—」pp257-291)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加須屋 誠 (KASUYA MAKOTO)
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号：60221876

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし